

Pantuta

No. 50



マモレ川に面した海軍第3管区司令部の船着き場(グアジャラメリン) 撮影2015年6月18日: 椿秀洋

- ボリビア開拓記外伝―コロニアオキナワ 疾病・災害・差別を 1. 生き抜いた人々― その1 ………渡邉 英樹
- 伝統技術を生かした土の建築 No. 5 (最終回) 2.
 - -アドベ―ロ・ファーマーとして土の技術交流を夢見て-…高橋 慎一郎
- 3. 日本人が見たリベラルタ ―その12― …… 大島 正裕

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ボリビア開拓記外伝

―コロニアオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々―

日本ボリビア協会相談役 渡邉 英樹

会報誌『カントゥータ』連載にあたって

戦後、開拓移民としてボリビアに渡った人々は入植当初から疫病、災害に見舞われ苦難の連続でした。入植した9割の人々が新たな人生を求めて転住して行きました。

残った1割の人達は壮絶な戦いの末に、未曾有の繁栄を築き、今日に至っています。その起死回生の過程では、やむなく、常軌を逸する行動を余儀なくされることも多々ありました。そのため「外伝」という名前をつけましたが、極めてリアルな正史でもあります。

出版元の琉球新報社のご好意により本誌 へのカントゥータ連載を認めていただき ました。ご関心を持たれた方は琉球新報 社(https://store.ryukyushimpo.jp)から拙 本をご購入いただけましたら幸いです。



まえがき

南米大陸のほぼ中央に位置し、塩の湖面にたまった雨水が鏡のように空を映し出すことで有名なウユニ塩湖のあるボリビア。ここに暮らす日系人は1万4千人と推定されているが、その半数近くが沖縄にルーツを持つ人々といわれている。

ボリビアには戦後の沖縄県からの移住者がジャングルを切り開いて造った広大な「沖縄移住地=コロニアオキナワ」がある。その広さは沖縄本島の面積の40%に当たる470平方もに及ぶ。そこに住む沖縄県系人は千人弱だが、1戸当たり300~500盆の大規模農業を営んでいる。すぐ近くに大河リオグランデの渡しがある第1コロニアは、サンタクルス市との路線バスの発着地となっている。その市街地の住人と県人の農場で住み込みで働くボリビア人居住者が、合わせて1万人に達した2000年に市制が敷かれ、その名も「コロニアオキナワ市」となった。

つまり日本の「沖縄市」のほかに、世界 にもう一つの「オキナワ市」の誕生を見た のである。

このコロニアオキナワ市で2018年の夏、戦前の沖縄県民がボリビアに移住したことを祝う「沖縄県民ボリビア移住110周年記念式典」が開催された。母県および県下各市町村からの関係者60人以上の出席を得て、総招待者数1200人に及ぶ盛大な式典となった。

私は、かつて国際協力機構(JICA) の前身の一つである海外移住事業団のボ リビア国サンタクルス支部に在籍した折 に、沖縄移住地の経済団体である「コロニ アオキナワ農牧総合協同組合(CAIC O) | の創設に関わり、コロニアの皆さん と苦楽を共にした。その縁で私も式典に招 かれ、臨席の機会に恵まれたのであった。 式典では、懐かしい人々との再会を果たし、 尽きぬ思い出を語り合ったが、その時、お 会いしたほとんどの方々から依頼された のが、CAICOの創設期のことを書き残 してほしいということであった。

コロニアオキナワは長い間、水害と干 ばつにより、作物の収穫ができずに困窮極 まる状態に何度も見舞われた。そのため離 脱者が後を絶たず、移住地の存続さえも危 ぶまれた。

壊滅寸前の混乱から立ち直ろうとした 起死回生の再建策も異常な出来事の連続 であった。

それが故に、これに 携 わった者たちも 常軌を逸する行動を余儀なくされた。

公にすればそれらの人間に迷惑がかか ると、皆が沈黙を守った。

戦後の日本人の海外移住の促進と集団 移住地への支援を目的に設立された海外 移住事業団という政府機関の職員であり ながら、経営指導を行う立場で「経営顧問」 という肩書きをもらって、CAICOの運 営の中枢にいた私自身も「何も語らずに いた方がよい」と考えて、これまで沈黙を 守ったまま過ごしてきた。

しかし、今やボリビア有数の経済団体と して発展した「CAICOの歴史」の中に、 一番肝心な創設期の部分が欠落したまま でよいのだろうかと思うようにもなった。

CAICOはコロニアオキナワが生き 残りをかけて、最後の手段として綿花事業 を導入するために創設された組織であっ た。しかし、その綿花事業は2年間の大成 功の後、天候異変とオイルショック後の綿 花価格の暴落により膨大な借金を残して 終った。

その事業の旗振りをした私は「移住地に 多額の借金を負わせた張本人」として 糾 弾され、現地の日本の政府機関からも 「好ましくない人物」との烙印を押されて しまったのである。

ところが、その後、現地の降雨量が多く なり、適作物となった大豆、小麦、サトウ キビ、陸稲などが好収益をもたらすように なった。綿花栽培で確立した機械化大規模 農業体制がこれらの栽培にいち早く対応 できて移住地に大変な飛躍をもたらした のだという。

会場でお会いした旧知の方々から「あの 時がなかったら今のコロニアはなかった」 と口々に言っていただき、心の棘が消えて いくのを感じた。光栄なことに、この度の 式典で「ボリビア沖縄県人会名誉会員」と いう証書まで賜った。それによって、私は 「CAICOのことを書くことを許され た | と感じることができたのである。

この執筆によってコロニアの歴史の空 白の部分を埋めることができれば幸いで ある。

もう一つは、ボリビアにおける日系人に 対する迫害である。元々、ボリビア人は日 本人を蔑視するようなところはなかった。 しかし太平洋戦争で敵国となった米国の 情報作戦は同盟国となったボリビアにも 及んだ。特に東部平原の辺境の地であった リベラルタ周辺では、その偏見が蔑視を超 えて迫害にまで至った。

地球の反対側にある国、一度も交戦したこともない遠い国に「こんなにもたくさんの戦争の犠牲者がいる」ということが、何にもまして衝撃であった。サンタクルス県には長崎県の出身者が多いコロニアサンフアンとコロニアオキナワという共に戦争で甚大な被害を被った県からの戦後の日本人集団移住地がある。そのサンタクルスには、白人が多いこともあって日本人蔑視が色濃く残っていた。日本人移住者を敗戦国から来た避難民とみなしていた。

これも知られざる移住秘史である。

日本は先の大戦によって、海外の日系人が受けた迫害の歴史をしっかりと検証して総括する必要があると思うが、存命する当事者が非常に少なくなってしまった。せめて、ボリビアで私が会った人たち、見聞きしたこと、そして私自身もヘイトスピーチの標的とされた体験等から、蔑視・迫害の実態を明らかにできればと思う。

「国は経済力、技術力、科学力、文化力をつけて平和外交に徹する」。これが10年間のボリビア生活で得た体験的確信である。

第一部 ボリビア沖縄県系人の歴史 戦前の移住者 ペルーからアマゾンへ

ボリビアに沖縄県人がやって来たのは 1908年とされるが、この人たちは沖縄 県から直接、移住してきたのではなかった。 サトウキビ畑での労働に従事して、その収 入を故郷の家族に送金することを目的に、 沖縄からペルーに渡ってきた人たちが、そ の後ボリビアに移り住んだのだ。 就 労 し たペルーの農場の劣悪な環境と過酷な労 働に耐えかねて、ゴム景気に沸くボリビア に活路を求めたのが転住の動機であった。

1870年に発明されたガソリン自動 車は、その魅力から普及が急速に進んだ。 その結果、タイヤに使われるゴムの需要

が一気に膨らみ、アマゾン河の上流域に大変なゴム景気をもたらした。

ゴムの木の種子が持ち出されて、主生産 地を東南アジアにとって代わられるまで は、天然ゴムの木はブラジルとボリビアの アマゾン河の源流域にしか植生していな かったからだ。

あらゆる国籍の人たちが一攫千金を夢 見てジャングルの中に集まってきた。

日本人も例外ではなかった。高温多湿な 気候の中で、密林をかき分けてゴムの木を 探し、樹液を採集する作業は、サトウキビ 畑の労働と変わりないかそれ以上の過酷 なものだった。

それにもかかわらず、2千人ほどの日本 人がいたと推測されている。

このゴム景気こそが沖縄県人をボリビ アに引き寄せたものだった。

「ゴールドラッシュ」という言い方もさ

れたが、それは採集した樹液を固めたボラチャという丸い生ゴムの塊の対価として元締め会社に支払われたのが英国の1撃金貨だったからだ。

金鉱山に入り金鉱石を採掘しなくても 金貨そのものに交換できた者もいたので ある。

実際に、奥アマゾンに入った清藤幸吉氏 から実物を見せてもらったこともある。

1971年8月まではサンタクルス市のスアレス商会や両替商・貴金属店でも1オンス(約 $31\cdot12$)35%の米国の交換レートに比例して、いとも簡単に1学金貨を購入できた。

ブラジルのロンドニア州グアジャラ・ミリンからボリビア側のベニ県リベラルタまでの延長45ものマモレ鉄道の建設を請け負った沖縄県出身の八木(屋宣)宣貞氏が、1907年にブラジル側から鉄道敷設工事を始め、ボリビア側の原始林を切り開く時には日本人30人を雇ったという記述が残っている。その中には沖縄県人もいたといわれている。

そうした先駆者の一人である、私が親交を得た新垣庸英さんは、1916年にペルーから雪のアンデスを越えてコビハにたどりついている。

新垣さんは、その途次、各地でゴム液採 集をしている日本人に出会っている。現地 にはヨコハマ、トキオ(東京)、ハポン(日 本)といった地名もあったという。

これらの地に入ったほとんどの人がペルーから雪のアンデス山脈を越えて、アマゾン上流域の支流を 筏 を組んで下って来

た人たちである。アンデス越えの様子については、新垣庸英さんの日記が、つとに有名である。1916年、庸英さんたち一行38人はアンデス越えの途上で見つけた同胞の墓の前で、志半ばで亡くなられた人を悼んだ。

その日の日記で庸英さんは、その無念さに想いをはせつつ「汝の骨は、此の雪中に 朽つるとも汝の進取の 気 象 に富める霊は永久に止まり、後進の同胞を激励し、 汝のあこがれ居たる森林地方の宝庫も我が同胞によって開発せられること、難事にあらざればなり」と綴っている。(移住研究第6号小野基雄氏の掲載文より。※気象

こうした苦難の道をたどってゴールドラッシュの地にやって来ても、人の世の常で一攫千金の夢を果たせた人とそうでない人が出てくる。移り住んだ場所、その時期、ゴム液採集労働者として一人前になるまでの雇用先等の運・不運によって大変な違いがあった。

新垣庸英さんは奥アマゾンに到着した後、道路工事や漁業に従事した。その後の1920~22年にかけてゴム液採集に従事した。密林での生活は事故や猛獣の襲撃、そして熱帯病など、多くの危険に満ちていた。しかも最も近い仲間の小屋までは数もから十数も離れていた。もちろん医者などいなかった。このため緊急事態の時には銃声で近隣の仲間に合図した。

しかし大けがや突然の重病によって発 砲する体力も失い、そのまま死んでいった 者もいたという。

庸英さんが知人の家に立ち寄って、従兄の死について知らされた日の日記には「秀嘉兄よ貧困なる家族、妻子を養い生活難よりのがれんが為め、大いなる決心を持ってはるばる万里の波路を渡り来たり未だに一厘の送金も送り得ず空しく異国の土と化すとは、ああ、増して故郷の父母妻子の心察してあまりあり……」と記している。

こんな厳しい状況下でも、ゴム液採集で 得た資金を元手にして、船を使っての各地 への行商や特技を生かしてのさまざまな 職業に就いてしっかりと生活基盤を築く 人々も出てきた。

その様子は1923年のリベラルタの現地新聞で知ることができる。

「日本人たちが農業に従事し豊富な野菜などを提供するようになってからは、物によっては、10分の1も安く買うことができる。(中略)農業分野だけに限らず木工細工、仕立屋、瓦製造などでもよいものを提供してくれる。ゴム樹液採集でも現地の人々に比べると倍以上の働きを見せている。日本人が生み出す成果は生活コストを60%も安くしてくれた」とある。

1930年に在ブラジル日本大使館の野田良治書記官がリベラルタに出張した時の報告では、リベラルタ町とその周辺の日本人数は169人(うち女性6人)そのうち沖縄県人は55人(うち女性3人)となっている。またリベラルタは「桃源郷」であったともいわれている。

日本人移住一〇〇周年誌『ボリビアに生きる』によると「その頃リベラルタでは、 多少のゆとりのある者が貧乏人の『土人』 の女の子をもらって育てる風習があった。 15~16歳の少女が駄菓子を売って歩くのが一般的で、持って出た菓子を全部売り尽くさないと家に戻れなかった。(中略)そのような場合、菓子を全部買いとって少女を一日の仕事から解放してやると、洗濯、食事の準備もしてくれたという。その上、自分の身体も提供してくれた。 それは日本人男性にとって、ジャングルの生活をかなぐり捨てるほどの居心地の良さであった。

少女たちは美醜の差によって値段の上下はあったが、買い受けられて妻となった女性たちは細やかな愛情で夫に仕えた」という。

この奥アマゾンの地域には2千人ほど の日本人がいたと推測されている。そのほ とんどの結婚が、法的手続きをとらない事 実婚であり、それが、南米大陸の最奥地の 新開地での当たり前の男女の結びつきで あった。その結果、現在1万人ともいわれ るボリビア最大の日系人を有するリベラ ルタの日系社会であるが、当時、曾祖父、 祖父が日本人であることを証明する書類 を持っている人はほとんどいなかった。そ れでも、この1万人は自分のルーツの一つ が日本と分かっている人たちであるが、ジ ャングルの中で教育も受けずに文盲のま ま、何も知らされずにいわゆる「土人」と して貧困の中で生涯を終えた人もいたに 違いない。

それを思うと、これを「桃源郷」と呼ぶ には複雑なものがある。

(つづく)

注:

一スペイン語の名称メモ

スペイン語の発音は最後が母音で終わる場合、 その前の母音を長く伸ばす。日本語の文献で地 名の「モンテーロ」を「モンテロ」、人名の「サ リーナ | を「サリナ | と記しているのをよく見 かけるが、スペイン語の発音になじんだ者とし て強い違和感がある。人名の場合、名前、父方 の姓、母方の姓の順で書く。レネ・バリエント ス・オルトゥーニョ大統領を母方の姓だけを残 して「オルトゥーニョ大統領」と記している本 もあるが、現地ではそれでは誰なのかを分かる 人は少ない。「バリエントス」なら誰でも分か る。簡略する場合は名前、父方の姓だけを書く のが一般的で、同姓の大統領が2人いた場合は 父方の姓と母方の姓の順で書いて区別してい る。「シーレス・サリーナ」「シーレス・スワ ソ」という具合である。

- 本書は琉球新報2019年2月~2022 年5月掲載に大幅加筆したものである。

一面積は昭和58年度版「移住地概要」国際協力事業団による。コロニアオキナワの面積は4万6877総となっている。

一本書は、日系2世の人たちが読みやすいようにルビを多用している。

(なお、本カントゥータ掲載ではルビは振って いないことをご了承ください。)

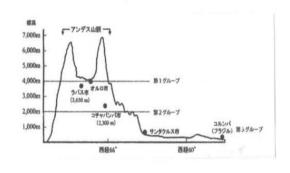


図1-1 高低差イメージ



図1-2 ボリビア国の位置

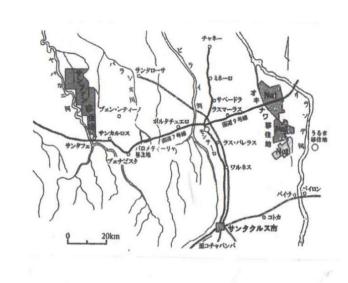


図1-3 サンタクルス県の日本人移住地

以上、出典「つなぎゆく絆」沖縄ボリビア協会・宮内久 光 作図

2. ボリビアの伝統技術を生かした土の建築 No,5(最終回) -アドベーロ・ファーマーとして 土の技術交流を夢見て-

土の空間工房SoBaTo 代表 髙橋 慎一郎

◆アドベーロ・ファーマーとは

皆さんは、世界中の建築家が憧れるプリツカー建築賞という賞をご存じだろうか?アメリカ合衆国のホテルチェーン「ハイアットホテルアンドリゾーツ」のオーナーが運営するハイアット財団(The Hyatt Foundation)から建築家に対して授与され、建築のノーベル賞と呼ばれている。建築家として、この賞をもらうことはとても名誉なことで、日本の建築家も東京都庁を設計した丹下健三氏などの数名が受賞している。

なぜ、この賞を紹介したかと言うと、
2022年の本年度は、西アフリカにあるブルキナファソ国出身の建築家のディエベド・フランシス・ケレ氏が受賞したからである。彼は日干し煉瓦(Adobe)に少量のセメントを入れた泥ブロック(Bloque de barro)を使って、小学校を設計するなど、同国とドイツで教育活動や社会活動にも従事している。この改良した日干し煉瓦を現代建築に用いたことは、土の建築に対してイメージを一新する機会になったのではないかと思う。

また、少し昔になるが、ボリビアと同 じスペイン語圏の中米メキシコ合衆国出 身で、建築界の巨匠のルイス・バラガン 氏もメキシコの伝統的な建築材料である



写真2-1 メキシコにあるルイス・バラガン氏設計の 日干し煉瓦造のゴンザレス・ルナ邸

日干し煉瓦を用いた住まいなどの設計で、 この賞を受賞している。

今まで日干し煉瓦は、ボリビアでは貧しさの象徴と捉えられ、焼成煉瓦と鉄筋コンクリートの近代的な建物に憧れる人も多数見受けられていた。しかし、ケレ氏とバラガン氏の建築界における評価から判断すると、今日、日干し煉瓦を含めた泥ブロックは世界的に注目されていると言えるであろう。建築家として、本誌47号で紹介したボリビアのザウール・サンドバル氏など泥ブロックの基礎とも言える日干し煉瓦を生かした建築を設計する人がいることから、伝統的なボリビアの日干し煉瓦の住まいにも新しい光が当たりはじめのではないかと思われる。

こうした泥ブロックづくりを、私はボ リビアの農村地帯で6年間学んできた。



写真2-2 建築家ザウール氏監修の日干し煉瓦の美し さと土壁に包まれた抱擁感を感じる天井



写真2-3 コチ・バケリーヤ村で、日干し煉瓦を黙々 と積む先住民ケチュア族のフェリックス氏



写真2-4 オルーロ県チパヤ村の芝土煉瓦の住まい

また、先の49号で紹介したように、コチャバンバ県のアンデス地帯に位置したコチ・バケリーヤ村での生活体験を生かして、現在、日本では、平日はサラリーマン農家として農業に携わり、週末は自分の小さな約100㎡の畑で、農業や時折、泥ブロックを製作し、土に触れた生活をしている。このような生活スタイルを自分は「アドベーロ・ファーマー(Adobero Farmer)」と名乗り、これから活動していこうと考えている。

ここで、「アドベーロ・ファーマー」 の定義を説明したい。「アドベーロ」と は、「土、藁、水を中心とした様々な素 材の組み合わせで作られる泥ブロックを 中心に、土の建築を作る者」のことであ り、自分はこれを「泥民(どみん)」と呼 ぶ。泥ブロックの種類としては、日干し 煉瓦やそれに少量の石灰やセメントを混 ぜた泥煉瓦、日干しタイル、巨大日干し 煉瓦アドボーン、圧縮泥煉瓦、版築ブロ ック、泥団子、芝土煉瓦、ネコ(半乾き の日干し煉瓦)などがある。用途しては、 日本では住宅の壁に使用可能だが、その 際には組積造(そせきぞう)になるので、 構造について十分な検討が必要だろう。 それ以外の用途としては、土塀、室内装 飾、物置に変わる現代版ミニ蔵、花瓶台、 土塀の笠木(かさぎ)、床タイルなど様々 な用途が考えられるので汎用性のある建 築部材といえるのではないだろうか。

また、「ファーマー」とは農民であるが、ただの農民ではない。アンデス地帯の農民が家畜の糞を積極的に堆肥として

活用することに見習い、「普段の食生活から出る生ゴミで堆肥(コンポスト)を作り、自然の恵みを生かした畑で野菜や果実を有機栽培する農民」である。



写真2-5 土塀の天端材に使用した日干し煉瓦に少量 の石灰とセメントを入れた泥煉瓦



写真2-6 花瓶台の日干しタイル

この泥民と農民の二つの民を合わせて「アドベーロ・ファーマー」と名付け、 現在、東京の武蔵野台地に位置する日野 市を拠点に、地球的な視野で、地域的に 行動しながら農的生活を行っている。 しかし、何故、日本で泥ブロックをと 思われる人も多くいると思う。

その理由としては、泥ブロックは化石燃料を使用せずに土が太陽光を浴びて、水の力で固まり、環境負荷が少なく地球環境に配慮した建材として注目されている点が挙げられるだろう。その評価の表れが、先ほど紹介した建築界の世界的なプリツカー賞を受賞するにも値した建築部材であったことが証明されたのではないだろうか。

また、南米大陸に位置したボリビアやペルーでは、プレインカ時代から現在まで日干し煉瓦は、住まいの壁材として使われてきた。日本も数は少ないが、日干し煉瓦や半乾きの泥ブロックのネコを積み上げた土塀や、まだ見たことはないが岡山県の吉備にある日干し煉瓦の農作業小屋など、日本にも泥ブロックの建物や塀が建てられてきた点も理由として挙げられる。



写真2-7 奈良県の法降寺の日干し煉瓦の土塀

世界や日本の泥ブロックの建築事例や、 50,000 個近い日干し煉瓦製作管理に関 わった自分のボリビアでの経験を活かし たいと考えている。

また、日本の土の建築といえば、土塗り 壁という鏝(こて)を巧みに扱う左官職 人の技術があげられる。この技術は、ど ういった壁を作るかによるが、まっすぐ で平らに鏝跡のない壁や光り輝く磨き壁 などを塗ろうと思うと、ある程度の修練 がないと塗れないだろう。

その点、ボリビアで学んだ日干し煉瓦をはじめとした泥ブロックは、自分の手を使い、鏝をあまり使わず、型枠に詰めて、作ることが可能なので、比較的容易に綺麗な土の建築部材ができると思っている。そうは言っても、日干し煉瓦づくりには幾つかの注意点があることを、ボリビアの左官職人や建築家から教わった。型枠を抜く際に、日干し煉瓦の際(きわ)が持ち上がりバリ(はみ出し)を出さない方法、ジャンカと呼ばれる泥の不充填を出さない方法、泥ブロックを積む技術、ブロックの長辺の長さと厚みの関係などである。

現在、この泥ブロックで生ごみ用の箱を作り、畑の栄養としての生ゴミ堆肥(コンポスト)を生みだしたいと考えている。今までの経験から生ゴミ堆肥は、牛糞堆肥などの他の堆肥よりも、土質改善に優れているので野菜がスクスクと育つ。これからも地道に土づくりをしながら、美味しい有機野菜を育てていきたい。

先の49号では、ファーマーの視点で、現

在の私の生き方に影響を与えたコチ・バケ リーヤ村で農民と共に生活したアンデス 地帯の農業を紹介した。

今回の50号では引き続き、アドベーロの視点で、泥ブロックの基礎とも言える日干し煉瓦の歴史、住民参加型建設、日干し煉瓦の上に施した土塗り壁などについて紹介したいと思う。

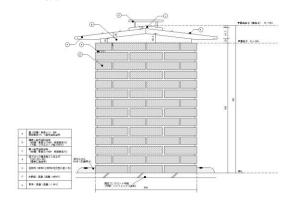


図2-1 生ごみ堆肥用の泥ブロック箱

◆日干し煉瓦の歴史

日干し煉瓦とは土と藁と水が混ざり合った泥を、太陽光という自然の恩恵を受けて固めた煉瓦である。力強い太陽光をあびて、風を感じて、徐々に乾いていく日干し煉瓦。すると、分子間引力で徐々に固まっていく。泥から土を部材とした日干し煉瓦は、厳しい自然環境の中を耐えて作られたので強く逞しい。それに部材としての役目を終えれば、そっと力を加えれば、土へと帰っていく柔軟性をもつ。

日干し煉瓦は、北極などの四季を通じて 水雪に覆われた地域を除き、地球上の至る 所、土の採取が可能であるところでは、大 昔から連綿と建築資材として使用されて きたものである。旧約聖書にも、モーゼが 日干し煉瓦を製作するのに麦藁を用いて

いたという記録がある。正確には今から約8000年前から古代文明が栄えたメソポタミアで、日干し煉瓦が建物の主要な構造材の一つとして使われ始めていた。最初は、手で整形する泥団子の形態をしていたが、木製の型枠に粘土をつめて取り出す方法が開発されてからは、日干し煉瓦の形態が綺麗に整い、住居の壁も容易に積むことが出来るようになった。

南米大陸に目を向けると、ペルー共和国の首都リマの市内から約200kmの所には約5000年前から日干し煉瓦が使用されていた、アンデス文明に属するカラル遺跡を見ることが出来る。南米大陸でも大昔から日干し煉瓦が建物の材料として用いられていたことは興味深い。

ボリビアにおける日干し煉瓦の歴史も 長い。具体的には、紀元前から紀元後1,150 年にティティカカ湖畔で栄えたティワナ ク文化のチュルパと呼ばれる共同墳墓な どで利用されていた。現在も熱帯雨林のア マゾン地帯を除いた、事実上の首都ラパス (注:憲法上の首都はスクレ)が位置したア ルティプラーノと呼ばれる高山地帯や、日 干し煉瓦作りを経験したコチャバンバの あるヴァッリェと呼ばれる渓谷地帯には、 大昔から日干し煉瓦を使用した伝統的な 建物を見かけることができる。

このように、ボリビアで日干し煉瓦が建物の材料として現在も使用されている背景には、良質な粘土分を多く含んだ土を確保しやすいことが挙げられる。また、私が生活をしていたコチャバンバ県は年間平均降水量が480mmと少なく、そして湿気も

少ないことも大きく影響しているだろう (参考:横浜の2021年度の年間降雨量は、 2052mmである)。



写真2-8 匠に積まれた石積み壁のティワナク遺跡

◆日干し煉瓦を用いた住民参加型建設

そうした歴史ある建築材料の日干し煉 瓦づくりを、コチャバンバ県で3棟のオル タナティブ教育(国の法律に依らない民間 教育)施設の学び舎と身障者リハビリセン ターの4つの建設工事現場(注:Cantuta No.46参考)で、現場監督として、左官職人 や現地に住む住民たちと共に携わった。

特に、学び舎の3つの工事現場では、住民参加型建設であったので、日干し煉瓦作りに地元の女性や子供をはじめ、数多くの住民が参加した。そして、数多くの人々が慣れた手つきで、日干し煉瓦作りに必要な藁切りや泥練りを初め、日干し煉瓦作りに必要な作業を行う姿には驚いた。3棟目の学び舎の都市から離れた農村地帯には、まだ、日本の「結い」と呼ばれるような建築

共同作業が見られたので、日干し煉瓦作りの技が住民の手の中にあるのは理解できるのだが、都市近郊の建設現場であった1棟目と2棟目の学び舎に参加した住民の手の中にも日干し煉瓦作りという歴史的遺産とも言えるの建築の技が残っていたのは、心底感動した。

また、コチャバンバ市内にある国立サン・シモン大学の建築学部の学生に伝統的建築技法を伝授するため土壁塗りワークショップも2棟目の学び舎で開催したこともある。



写真2-9 日干し煉瓦作りに参加した地元の女性たち

◆日干し煉瓦の上に施した土塗り壁の日本の建築技術

住民参加型の方法で建設した学び舎で 日本の技を伝授した経験について述べた いと思う。日干し煉瓦の上に塗る土塗り壁 の材料づくりや施工方法に、日本の伝統的 な左官技術を取り入れるような施工方法 を現地の住民に紹介した。

荒々しく、欠けたりしている日干し煉瓦を積み上げたままの土壁の住まいをボりビアで数多く見た。こうした素朴な土壁は人の心に響く情緒的な風景を形作ることもあるが、日干し煉瓦の欠けた部分に虫が住み、場所によっては不衛生で問題になることもある。衛生的に問題ない土壁にするためには、日干し煉瓦壁の上に綺麗な泥をしっかりと塗る方法も一つの方法であろう。そこで、コチ・バケリーヤ村の3棟目の学び舎では、日干し煉瓦の上に塗る荒壁に使う泥に、日本の土塗り壁技術を組み込んだ。

ボリビアでは、日干し煉瓦や土塗り壁の 泥は、使う前日に混ぜ合わせておくが、日 本の荒壁は、数ヶ月から1年、土と藁と水 を混ぜ合わせて寝かせておく。水と藁と粘 土質の強い土を混ぜ合わせて、寝かせるこ とで、混ぜ込んだ藁が醗酵する。すると、 溶けた藁の繊維質が粘土の粒子に絡まっ て粘りを増すことで硬い荒壁ができる。同 時に、藁の成分のリグニンが接着剤の働き をするので、更に硬く水に強い荒壁の材料 となるのである。こうした技術を、コチ・ バケリーヤ村の住民に伝授して、共に作業 を行った。

また、この泥を直接、日干し煉瓦の上に 塗ると収縮率が高く剥離する可能性があ るので、この泥を砂で割り、一度塗ってか ら、荒壁の泥を塗った。その荒壁に檜垣

(ひがき)と呼ばれるようひっかき傷を つけて、上塗り材料の接着性が増すよう施

した。上塗りは、現地とれた赤土に対して体積比で10%以下になるようポルトランドセメントを入れた泥を塗って仕上げ、ボリビアと日本の間の土の技術交流を行った。

◆アドベーロファーマーとして、土の技術 交流を夢見て

ボリビアで日干し煉瓦作りやその煉瓦を使った土の建物の建設方法を学んだ。日本に戻ってからは、建築家や優れた左官職人から直接技術指導を受けたり、セミナーに参加したりして、日干し煉瓦を含めた泥ブロックの技術や知識を蓄えてきた。今後は、ボリビアの建築関係者と日本で学んだ経験や知識を活かした泥ブロックの建築技術交流を実現できればと考えている。

また、この10年間は、農的生活をしながら、様々な野菜の栽培技術、調製(収穫した野菜を洗うなど、販売するために行う作業)技術、加工技術、調理技術を学んできた。そうした経験を活かして、ジャガイモの原産地であるボリビアで現地の先住民と一緒に畑を耕しながら、農業に関する土の技術交流をしたいと考えている。例えば、ジャガイモであれば、イモの茎を立ち上げるように3回の土寄せを行うなどといった農業の技を伝えたいと思う。

最後にこの会報CantutaNo.46からNo.50 までの記事は、雑誌『月刊さかん』などに 寄稿した記事を改稿した文章、新しく書き 下ろした文章、ボリビアでの仕事や旅で見 聞したエッセイなどを纏めて自費出版し た『チャスキ ~ボリビア 土の建築奔走 記~』2021 より内容を抜粋・改編したものである。この書籍も販売しているので、ご興味ある方は下記メールアドレスまでご連絡頂けたら幸いである。

5回に渡り短い期間だったが、ボリビア の土の建築の魅力を発信してきた。衣食住 を支える土の建築が持つ豊かさを少しで も感じて頂ければ幸いである。

最後に日本ボリビア協会会報誌でこの ような発表の機会を与えていただき、厚く お礼申し上げます。 (終わり)

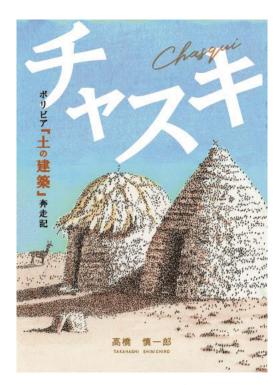


写真2-10 本「チャスキ ~ボリビア 土の建築奔走記~」の表紙 (表紙 銅版画 制作:吉良 康矢 氏)

「チャスキ ~ボリビア 土の建築奔走記~」

お問い合わせ先:

E-mail: sobato@hotmail.co.jp (髙橋まで)

価格: 2,400円(税: 送料込)

3. 日本人が見たリベラルタ —その12—

財団職員

明治大学島嶼文化研究所客員研究員
大島正裕

1. リベラルタの沖縄人

今年2022年は、沖縄返還50周年という記 念すべき年に当たる。 1990年に始まった 「世界のウチナーンチュ大会」も第7回目 を迎え、前回大会から6年を経て10月31日 ~11月3日に無事に開催されて、ボリビア からも日系人が参加した。また、この大会 の機会を捉えて、JICA沖縄は、10月29日に 「OKINAWA TO 沖縄ビジネスシンポジ ウムー中南米日系社会連携ビジネスの魅 カー | を実施し、琉球大学も11月1日に 「琉球大学と中南米県系人との未来連携 を考える~これまでの取り組み、今後の展 望~」と題したイベントを組んだ。私も両 イベントにオンラインで参加し、現在のボ リビアと沖縄との貴重な交流を知ること ができた。

更に、読谷(よみたん)村教育委員会の村史編集室に勤務されている中田耕平氏から、以前、同氏が上京された際、『写真で見る読谷村の移民・出稼ぎ』という冊子をいただいたのを思い出し、本稿を執筆するに当たって改めて熟読して、「沖縄県の移民研究の伝統と厚みに改めて感じ入った。このような沖縄における中南米の「近さ」について改めて考える機会を得て、今回はそうしたことを思い出しながら、本稿を書いている。

リベラルタの沖縄人は、日本人移住者の 中で確固たる位置を占めていきた。既に Cantuta 44号所載の「その6」でも紹介した 1914年のリベラルタ沖縄県人会の創設者 上原松四郎や同45号「その7」~同47号「 その9」で詳述した新垣庸英も沖縄人であ り、このあたりのリベラルタの沖縄人を追 跡したものとしては、三山喬の「アンデス を越えて一密林の孤独から生まれた戦後 村計画」(『還流する魂 世界のウチナーン チュ120年の物語』岩波書店、2019年)所 収がある。この中に具志寛長というリベラ ルタ在住の沖縄人が登場する。具志寛長は リベラルタへの沖縄県人移民の戦前と戦 後との橋渡し役を果たした人物だが、この 具志から戦後オキナワ移住地で活躍され た安仁屋晶に送られた書簡や資料が、「安 仁屋晶関係資料」として国会図書館の憲政 資料室に収蔵されている。本稿では、この 具志寛長の残した資料を参照しながら、リ ベラルタの沖縄人について考えてみたい。



写真3-1 現在のリベラルタ市の景色

2. 具志寛長によるリベラルタにおける沖 縄県人史

具志家のリベラルタへの定住の流れは、 沖縄人のダイナミックな移動を見る上で、 極めて興味深い。具志寛次郎は今帰人村字

渡喜仁の出身で、1921(大正8)年に契約 移民としてペルーに渡り、翌年ボリビアの リベラルタに転住した。この寛次郎には息 子が二人おり、1933年、寛長と寛市の兄弟 はブラジルに移住し、サンパウロ沿岸のジ ュキア (Juquiá) で農業を営んだ。3年が経 ったころ、リベラルタの父寛次郎から呼び 寄せられ、二人はアマゾン川を遡り、リベ ラルタに転住した³。ボリビアのサンパウロ 付近から、南米大陸のほぼ中心部への移動 であり、地図で見るだけでも凄まじい移動 距離であり、沖縄人家族の結束の強さを伺 い知ることができる。 事業が軌道に乗り 、あるいは拡充するときに、家族、一族や 故郷の友人・知人を呼び寄せる「呼び寄せ | については、戦後の沖縄の中南米への移 住政策に影響を与えた米国のティグナー 博士も注目していた。ティグナーは、1952 年にリベラルタの日本人社会で活躍した 比嘉良儀にインタビューを行っているが、 それによると、比嘉は1912年にペルーのタ ンボパタを経由してラパスに入り、その後 、1913年にリベラルタに移って食料品店を 開いた。4年後、比嘉は沖縄から兄弟の良 喜を呼び寄せたのが、沖縄県人によるボリ ビアへの「呼び寄せ」の最初の事例である という。良喜は、1925年にラパスに移動し 、そこで店を持ち2年後に沖縄から知人を 呼び寄せている4。 ティグナーは、ペルー からボリビアへの転住者と「呼び寄せ」に ついて、「内地人(沖縄以外出身者)」と 「沖縄人」の人数を比較している。 確か にその比較を見ると、沖縄人は、相対的に 「呼び寄せ」で人数を増やしていることが

分かる。

年	内地人		沖縄人	
1900-	ペルーか	300	ペルーか	40
1915	らの転住	人	らの転住	人
1916-	ペルーか	108	ペルーか	5人
1941	らの転住	人	らの転住	
	日本から	25人	沖縄から	29
	の呼び寄		の呼び寄	人
	せ		せ	
1945-	日本から	51人	沖縄から	52
1953	の呼び寄		の呼び寄	人
	せ		せ	

図3-1: ボリビアへの転住・呼び寄せ5

さて、具志寛長の残した「ボリヴィア国に於ける日本人移住者の足跡」は、リベラルタにおける沖縄人の動向について触れられており、幾つかの興味深い情報もあるので、これを参照しながら、沖縄人史を纏めてみよう。。

具志寛長は、「リベラルタ市の沖縄県人会の創立は日本人会の設立よりも一年先に設立されており、その原因はリベラルタ市在住日本人の40%は沖縄県人が占めていて、農業者が殆ど沖縄県人で、色々

- 〔な〕問題が県人の間に起き、なお、また 当市の官憲との折衝問題等でその度ごと
- 〔に〕これらの紛争問題の解決等については、自ら県人の指導によって解決せられており、その度ごと、県人会の必然性が論じられ、1914年一部有識者によって創立委員会が設けられ、遂に、1914年2月15日に満場一致で設立せらる」と述べている(なお

読みやすいように現代仮名遣いとし、適宜 句読点を補った)。このように、県人会は 県人内の問題を解決し、更には地元社会と の折衝・調整を重要視していたことが分か る。

本文書には、県人会創立委員の名前が書き留められているが、その筆頭に県人会創設に指導的役割を果たした元軍人の上原松四郎(国頭村字安波出身)の名前が置かれている。次に、同人の助手として岸本諄亮(名護町出身)これに前述の比嘉良儀(本部村字並里出身)あたりが、この後の沖縄県人会や日本人会で重要な役割を果たす人物といえる。

発足した沖縄県人会の趣意書や会則については、上原松四郎を紹介した前述のCantuta第44号「その6」でも紹介したので本稿では省略するが、具志は、沖縄県人会の創立総会の模様を県人会議事録から転写したようである7。この創立総会に、創立委員18名のほか、他県からも8名の出席があり、更にリベラルタ町内から80名、郊外農業者100名以上が参加したこと等が分かる。1914年時点の沖縄出身者のリベラルタでの定住を確認できる貴重な資料と言えよう。特に創立総会に沖縄県人以外の他県人を参加させたことは、今後の日本人会の創設を睨んだものとも考えられる。

創立委員長の上原は、冒頭以下の通り挨拶した。軍人然とした上原の生の声が聞こえてくるようなので、そのまま引用する。 「本日は皆様御多忙中、かくも多数御集会下さいまして厚々御礼申上げます。なお、また特に他県のお方にも御出席下され厚 々御礼申上げます。

われらは、祖国日本が経済的に窮乏し、 日本にいては将来生活苦に喘がねばなら ぬ状況であり、ペルー国へ出稼ぎ移民とし て渡って来た訳でありますが、ペルー国に おいては成功の見込みがなく、このボリビ ア国のゴム景気を追って大アンデスを越 えて来た訳であり、現在われら同胞は祖国 日本の出先官憲の保護下にある訳ではな く、独立独自の冒険的な環境にあるのであ ります。従って、今回われら県出身の者 は、強く協力して行く為には指導機関であ る県人会を設立して相互間の協力が必要 であり、今日ここに県人会が設立して行く ことは慶びにたえません。」(なお、読み やすいように現代仮名遣いとし、適宜句読 点を補った。)

上原が、県人会からその先にある日本人 会を相互協力のための組織として明確に 位置づけている様子が分かる。

この後、総会では県人会執行部が選出され、 創立委員長であった上原が会長に選出され、副会長に岸本諄亮、書記に比嘉良喜、会計に比嘉良儀が選出された。

1915年度の総会の議事では、以下のような議論も行われている。

議題1. 現在、県人会は借家で会を実施 しているが、会の充実に伴い会場を設立す る。

議題2.会費については月50銭とし⁸、必要に応じて会費の値上げを行う。但し会費の値上げについては総会又は臨時総会で議決される。

議題3. 本沖縄県人会は、日本人会に先

に設立されたが、近い将来、現在日本人会 創立委員会で草案が出来つつあるので、日 本人会はわれわれ全員が入会しなくては ならない。日本人会は日本国の領事館に代 わるものなので、日本人は総て入会する義 務がある。そのため、わが県人も他県人に 遅れないよう入会すること。

議題4. 県人会の評議員は、毎月第3日 曜日に参集すること

当時の沖縄県人の代表者が考えている 県人会や日本人会の方向性を探るヒント となる資料である。また、本資料が貴重な のは、創設初期の県人会会員名を掲載して いることである(写真3-2参照)。

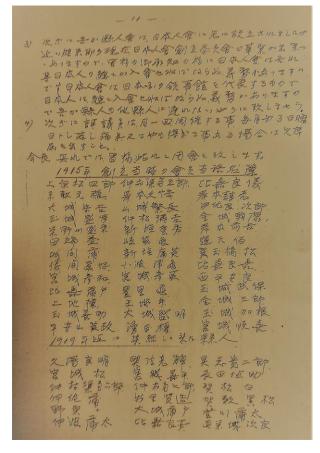


写真3-2 1915年会員名簿

1915年時点で県人会は39名、1919年には 新たに18名が加わり、加盟者は緩やかに増

えていった。この頃、沖縄県人のみならず リベラルタの日本人全体の人数が増加し ていったが、日本人の中で沖縄人がどのよ うに位置づけられていたのか、興味深い記 録がある。1916 (大正4) 年2月、リベラル タを訪問した堀内伝重(Cantuta第41号 その3参照)は、当時のリベラルタで重要 な小売業であった氷製造のエピソードに ついて紹介している。当時、氷製造場は、 氷屋 (氷販売店) 用の卸販売価格と家庭用 の小売販売価格を分けており、家庭用には 安く販売していたらしい。日本人氷屋は、 安価に氷を入手するために子供を氷製造 元へ買いに行かせて家庭用の価格で仕入 れようとしたようで、これが明るみにでて 小売価格を引き上げられ、2~3日の休業 を強いられたという。 氷屋のような小売 業は、利益を手っ取り早く上げることがで きるため、日本人に人気の商売で、日本人 内でもしばしば競合が起きたが、堀内は、 トルコ人やユダヤ人達のような外部の競 合者に対抗するためにも同胞で組合を組 織すべしといっている。その流れで堀内は 「我がコロニアを県別とすれば、沖縄の百 八名、鹿児島の九十八名を最多とせん。質 素にして貯蓄心に富む事に於て亦、この両 県人が最も成績好し。然れども琉球人が、 内地人と競争をなす事は惜しむべし、惜し むべし」と述べており9、日本人内でのまと まりの阻害要因として沖縄人を位置づけ ている。イメージ論のみで断定することは 避けたいが、沖縄県人会の創設は 「内地 人」との協調関係の確立という意図もあっ たのかもしれない。

1916年1月3日の定期総会で、上原は、前年創設された日本人会の初代書記に就任したため県人会長の退任を発表し、その後任選挙が行われた結果、副会長の岸本諄亮が二代目会長に就任した。また、会費の徴収にも力を入れ、リベラルタを5地区に分け、2名ずつで担当して会費の回収に出向く形も整えられた(これらは、日本人会でも踏襲される)。

1920年1月3日、岸本会長の定期総会での 開会の辞では、日本人会が軌道に乗り毎月 開催されているため、沖縄県人会は特段の 議題もないこと故、しばらく未開催だった ことが分かる。ただ、新入会員も増えてき たので、「今年は盛大に新年宴会」を催す とある。 この1920年は、あとで振り返る と、リベラルタの日本人が最も元気なとき だったかもしれない。上原前会長は、この 経済的余裕を喜びつつ「会の基本金を積立 て、近々建設せねばならぬ会場に当てる | よう「貯金制度」を始めたらと提案した。 この提案を受けて、「沖縄県人会基本金旨 意書」(写真3-3参照)が起案され、そ こに会員、非会員を問わず、名前と寄付金 が書きつけられることになった。リベラル タからは、この1920年以降、転出者が相次 ぎ、少しずつ日本人数が減っていくが、転 出する度に沖縄人が会場のために寄付し ていく様子が分かる。

1932年には、一旦集まった398円¹⁰を念願だった会場建設に投じた。「沖縄県人会場建設の為め基本金全額建設工事に消費し残額無し」との記載が見える。1937年8月14日、268ボリビアーノスの寄付金が今度は

改築費に充てられたという記録がある。

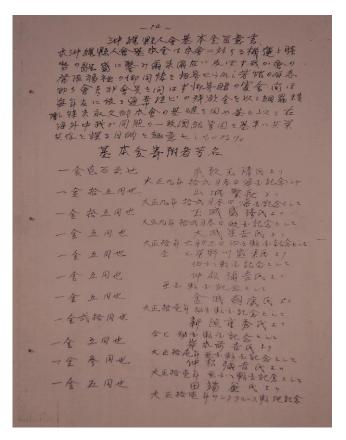


写真3-3 沖縄県人会基本金旨意書と寄付者名

この文書では、1950年までの収支表が掲載されており、1937年以降も会場修理費の記録が登場するし、また、別の使途としては、1947年7月15日にリベラルタからの転出者も多数居住したトリニダ市水害見舞金等にも使われている。そして、具志が転載したこの収支表の記録の最後には、1950年1月10日の次のような戦後オキナワ移住地建設に繋がる一文が記されている。「今回聖市(サンタクルス市)沖縄市建設の為全額消費となる。13,805ボリビアーノス」。

この戦後に繋がる重要な記載について は、オキナワ移住地建設について述べる稿 で再度検討してみたい。

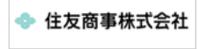
(つづく)

- 1 読谷村史編集室『写真で見る 読谷村の移 民・出稼ぎ 世界のユンタンザンチュ』読谷 村役場、2018 年
- ² <u>BI 040320208de49 4Ribedapro.pdf</u> (produccion.gob.bo) (最終閲覧 2022 年 12 月 6 日)
- ³ 三山、50 頁。また、安仁屋晶『コンドルの 舞う国 ボリビア移住記』(2006年)、141 頁。
- ⁴ TIGNER, James Lawrence, "The Ryukyuans in Bolivia", *Hispanic American Historical Review* (1963) 43(2), p.211
- ⁵ *Ibid.*, p.212. 筆者が、ティグナーの記載を もとに作成
- 6 以下、特段注釈がない場合の資料の引用については、具志寛長の「ボリヴィア国に於ける日本人移住者の足跡」からの引用。安仁屋は、リベラルタの日本人の歴史を教示してくれるよう具志に要望していて、それに対して、具志から返信があった。具志はその返信で詳細なリベラルタ沖縄人史を書き送った。戦前と戦後に分けて書かれる予定だったようだが、残念ながら、国会図書館の該当文書には、戦後の歴史についての文書は残っていない。

- 7 筆者は、沖縄県人会の議事録が現存しているのかどうか確認できていない。
- 8 1912 年の外務省員伊藤敬一の報告では、ペルー領内で日本人が多かったボリビアとの国境に近いマルドナードでは、バナナー房小が2円、大が4円とあるので、50 銭はそれほど高額ではない(伊藤敬一「「秘露国「マドレ、デ、ディオス」河附近二於ケル状況一班」(外務省通商局『移民調査報告』第9巻、1912年所収)。
- 9 堀内伝重『聖母河畔の16年』、1926年、60-61頁
- 10 在留日本人が重視していた天長節事業では 500 円程度かかることも珍しくないが、 398 円でどの程度の建造物を建設・購入できるのかについては、今後調査予定である。

編集委員 椿 秀洋 杉浦 篤 細萓 惠子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎











Copyright© 2002-2022

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)